

## ● 制作

# 水の結び目 —分断された都市をつなぐ河川 commons の再構築

TONG Yang

園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム (主指導教員: 霜田 亮祐)

### 1. 研究の背景と目的

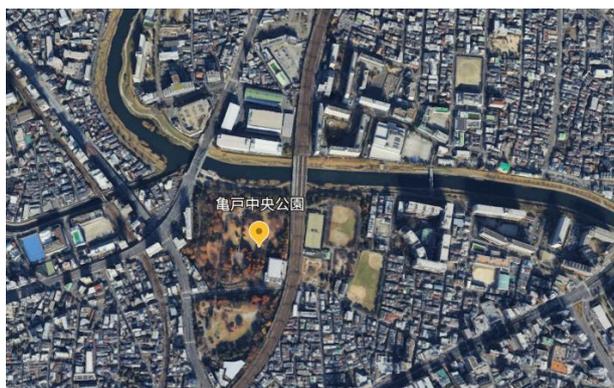
かつて都市の動脈であった河川は、近代化に伴う陸上交通への転換と治水対策により、生活空間から乖離した存在となった。本研究対象の旧中川は、かつて激しく蛇行する物流路であったが、低地特有の水害リスクを抱えていた[1]。1916年の荒川放水路開削により本流から分断され[2]、その後の工業化と近年の宅地化を経て、現在はスーパー堤防等を備えた「生活と生態の川」として再生している[3]。

しかし、物理的な親水化が進んだ現在も、旧中川は墨田・江戸川・江東の三区を隔てる「行政的境界」として依然として都市の連続性を阻害している。本研究は、旧中川を単なる境界ではなく、三区が共有すべき「文化的資産」として再定義することを目的とする。河川空間を媒介に行政区の壁を越えた「隣人」同士の関係性を構築し、都市の分断線から新たな「水の結び目」へと転換するための景観設計を提示する。

### 2. 対象地

本研究では、前述した墨田・江戸川・江東の三区が接する境界領域において、旧中川の水辺空間と一体的な利用が可能である「亀戸中央公園」を具体的な対象地として選定した。

同公園はA・B・Cの三地区から構成されるが、このうち旧中川に隣接しているのはB地区およびC地区である。C地区は主に運動施設群によって占められ、利用用途が特定の活動に限定されている。これに対し、B地区は広場や豊かな植栽地を有し、多様なアクティビティを許容する総合的な公共空間としての特性を備えている。したがって、本研究が目指す都市の分断を解消し新たな交流を生み出す「水の結び目」としての景観設計を展開する上で、最も親和性が高いB地区を計画対象とする。



### 3. コンセプト

本研究の核心は、旧中川を単なる「行政境界」から、墨田・江東・江戸川の三区が共鳴する「水の結び目 (Water Node)」へと再定義することにある。現状の旧中川は、護岸整備が進んだものの、依然として地域を分かつ物理的・心理的な「壁」として機能しており、広域的な連携は希薄である。一方で、分断により生じた「静穏な水域」という特性は、都市において稀有な潜在的価値を有する。

本提案では、この価値を活かし三つの次元で結び目を構築する。第一に、三区の動線を亀戸中央公園へ集中・交差させ、物理的境界を融解させる「空間的結び目」。第二に、水を園内へ引き込み、共有財産 (commons) としての意識を醸成する「知覚的結び目」。第三に、各区の活動を融合させるプラットフォームを整備する「文化的結び目」である。

かつて流域を翻弄した水害の歴史を、現代においては地域を縫い合わせる「紐帯」へと変換する。これこそが、共有の河川文化を基盤とした多地区連携の理想像であり、本設計の到達点である。

### 4. 設計提案

具体的な設計手法は、以下の三点に集約される。

第一に「境界の融解」である。従来のコンクリート護岸が生む心理的隔絶を取り払うため、緩やかな傾斜や親水テラス、連続する植栽帯を配置する。公園と水辺が地形的に連続するシームレスな移行空間を創出し、利用者が行政区の境を意識することなく、自然と水際へ誘われる環境を整える。

第二に「公園と河川の融合」である。旧中川の水を直接引き込み、潮位の変化や浄化のプロセスを可視化する水景 (浅い池やせせらぎ) を園内深部へ展開する。水の揺らぎや音、気配を都市空間の奥深くまで浸透させることで、三区を視覚的・触覚的に繋ぐ「水の紐帯」としての水系循環を確立する。

### 引用文献

[1] 江戸川区史編纂委員会編『江戸川区史 第1巻』江戸川区、1976年

[2] 国土交通省 関東地方整備局 荒川下流河川事務所「荒川放水路の歴史：荒川放水路の開削」

[3] 東京都建設局「東部低地帯における河川整備計画」2015年

